

# 贅沢な孤独



## 第一章

---

私は、向かいのアパートに住んでいる幼馴染みの五月雨（さつきあめ）が好きだ。雨は十五歳で、私と同じ日に生まれた。

雨の父はナツ、母は雪という名前で、そろって馬鹿で、美しい。二人の名前を混ぜて、夏の雪なら雨だろう、と考え、雨と言う名を付けた。昔、ナツにそう聞いた。

ナツは、南都と書く。南の都がどこを差すのかは本人も知らないらしいけれど、五月ナツは三十五になるのに、まだ結婚しても働いてもいない青年みたいに綺麗な男だった。

なよなよしていて私はそんなに格好いいと思わないけれど、雨は綺麗な父親を自慢にしている。反対、に母親の雪のことは少し嫌っているようだった。

五月雪、旧姓石野雪は十六年前ナツに強引に結婚を約束させられたらしい。雪はその頃から美人で若い男に人気があって、今より更に綺麗だったナツはいまよりもっと馬鹿で、どうしても雪と結婚したかったらしい。半分脅迫のような形で婚姻届に判を押させ、一組の夫婦になった。その結果、馬鹿な雪はナツをほっぽって十六年間、つまり今も浮気ばかりしている。だから雨は雪が嫌いなのだ。

綺麗で馬鹿な男と綺麗で馬鹿な女の間生まれた雨は、やっぱり綺麗で、そしてやっぱり馬鹿だった。勉強は、学年で一番できた。けれど、日常生活を共にするとそれが信じられないくらい、馬鹿だった。

「どうしてそうなるのよ」が、五月雪の口癖だった。ナツや雨が馬鹿すぎるからだ。たとえば、この間の進路調査の時に雨は、「高校にはいきません。外国にいきます」と言った。担任は、この勉強のできる雨のことだから海外でなにかを学ぶのかと勘違いしたようだったけれど、本人に詳しく聞くと「海外で死ぬまで自堕落に暮らしたい」ということだった。

自堕落に。それは馬鹿がすることだと雪は言った。「高校行って、大学行って、社会人になって適当に、そうその子とかと結婚すればいいのよ。何が自堕落よ、どうしてそうなるのよこの馬鹿」だそうだ。私もそう思った。

ちなみに、雪の言う「その子」はその時ナツと一緒にそうめんをずるずるとすすっていた私だった。私を指差して適当な子呼ばわりする雪をにらんだものの、もっと言えば、私が雨と結婚する、と思った、私、西野海は雨と同じ十五歳で、雨の両親よりは頭のいい父と母の間に生まれた。そんなに美しくない父と母だったけど、私は二人の綺麗なところを寄せ集めてもたりないくらい綺麗に生まれることができた。多分、同じ日に生まれた雨の分の美しさが余ったから神様が私にくれたんだと思う。

西野家と五月家は私たちが生まれる前から父親同士が仲が良くて、男か女か見分けがつかないころから雨と私は一緒だった。だから、私は雨の両親をナツ、雪、と呼ぶし、私は雨が好きだから中学三年になっても家に入り浸るのもやめない。

十五年。それはナツや雪にとっては人生の半分にもならない短い時なんだろうけど、私と雨にとっては全部だ。

生まれてからずっと、私は雨の傍にいる。雨の全部と私の全部は同じだ。同じ時を過ごしてきた。

それはこれからも変わらない、そうあるべきなんだ。雨は私と一緒に高校に行って、大学に行って、結婚する。雨は働いて、私は雪よりちゃんとした妻、母になる。浮気なんてしない。雨さえいればいいから。

でも、雨は馬鹿だから自堕落に生きるだとか、腐るように少しづつ死にたいと言う。そしてそこに私は存在してはいけないという。

孤独は、一人じゃないと成り立たない。両親もいて、自分を好きだという女の子がいて、それでも一人で腐るように生きて死ぬのが贅沢で、孤独。それが雨の言い分。

「どうしてそうなるのよ」だ。

馬鹿が言うことは、馬鹿でもなければ頭が良くもない私にはわからなかった。贅沢な孤独に生き、贅沢な孤独に死にたい。どうしてそうなるのよ。そんな気分になる。私も大人になったら雪みたいになるのだろうか。西野海と石野雪。少し似ている。少し、嫌だ。

雨は大人になったら、どんな男になるだろう。

ナツと雨を比べても、まだ十五の雨の方がしっかりしてまともに見える。ナツにそう言うと、十五の時は自分もしっかりしていたと答えられた。しっかりしていなくても雨なら構わない。ナツは嫌だけど。

私はこの少年を更生しなければならない。私の夫になる彼を、腐らせてはいけない。ぎゅっとこぶしを握った、十五の夏だった。

今日は朝から五月家に勝手に入り、居間でナツと一緒に朝食を食べた。私に来ることは雪にはわかっていたようで、四枚のトーストがちょうどよく焼けた。

ナツは育ちが悪そうと言ってはなんだけど、トーストを食べるときぱらぱらとパン屑を膝にこぼす。その前に私はすかさず皿をナツの左手に持たせた。

二十も年上のオッサンの世話を焼く私を見て雪はけらけら笑い、「いい嫁になるわ、海は」というので私は少し得意になった。

「けどオッサンの世話は妻がしてよね、雪」

「嫌よ。昔はいい男でももう見飽きたわ、ナツは。雨の世話のほうが楽しい」

「雨は雪が嫌いなんだから交代してよ」

「うるさいよ二人とも」

雨はクールに、そして父親とは違って綺麗にトーストをさくさくと食べた。ナツは年甲斐も無く唇を尖らせる。

「なに、この家は。皆俺がいないの？」

「いないわよ」

ナツはため息をつき、雨の頭を撫でた。「お前も二十年たったら誰にも相手にされないからね...」私は二十年経った三十五歳の雨でも、四十五歳の雨でもナツより好きだ。今だってナツよりずっと大人びて落ち着いている。

「雪、大人になると男は馬鹿になるの？」

「そうよ。皆そうよ。私達のかわいい雨以外は」

「ならいい」

さくさくさくさく。四人黙ってトーストを食べ終える。この瞬間は、雪が不倫女だということも、ナツの情けなさやダメさも、雨の馬鹿さも忘れ、私も「五月海」になったように感じられた。隣を見るとナツの膝にはやはりパン屑が落ちていた。

朝食を終え、雨と二人で家を出る支度をする。そこで雪が私を振り返った。

「今日、終業式よね？」

「うん」

「帰りに二人で西瓜買ってきて」

と、私の手のひらに小銭を落とす。

「了解」

雪は西瓜が好きで、毎年夏休みに五月家に行くたび西瓜を食べているのを目撃する。一人で三日程でほとんど一玉、食べる。その間は、男より西瓜に夢中なようでいつも家にいる。

「俺はまだ仕事だ」

いつの間にかスーツ姿のナツはそれでもサラリーマンに見えなかった。まるで、ホストだった

。

「海のセーラー服もあと半分か」

私のセーラー服に包まれた体を、上から下まで眺めてナツは親父臭く言う。

「なにそれ、いやらしい」

「俺は海の親みたいなものなんだからいいんだよ。嫌だなあ、雨も海ももう高校生になっちゃうのか。俺もオッサンだよなあ、ああ嫌だ」

私は早く、大人になりたい。雨を大人にしたい。百歩譲って、ナツみたいな大人にでもいいから。

「雨、行くよ」

「ん」

雨の学ランもあと半分。それは私にとって嬉しいこと。雨が大人に近づくこと。高校生になって、大学生になって...

。 行ってきます、と家を出て、私は隣を歩く雨の横顔を見た。まだ子供のそれ。けれど前を見る目は冷めていて、雪にそっくりだ。

「海、また怪我してる」

私の腕のやけどに気付いて雨が指差す。

「フライパンにぶつけた」

「...気を付けろよ」

うん。笑ってうなずく。雨が心配してくれたことが嬉しかった。

終業式のあと、通知表を受け取り、解散。

私と雨は同じクラスだから、すぐに雨のところに寄って行って通知表を見せてもらった。「5」ばかりならんでいる中、体育は「3」だった。授業のたびいつも面倒がってだらだらしているからだろう。

雨と一緒に帰り道にある八百屋に寄って、雪のための西瓜を買った。

西瓜をくるむビニール紐の網からのびた持ち手を二人で掴んで、五月家まで歩く。小学校高学年から恒例になっているので、八百屋も私達も慣れていた。

「重いねえ」

何気なく、呟いた。毎年言っていたことだけど。

「今年で最後だ。少なくとも僕は。だから海も最後にしていい」

雨が言った。きっぱりと、決まったことという口調で。悲しくなった。

「最後じゃない」

私はそう言って立ち止まった。勝手に、足が歩くのを止めた。二人の間で西瓜がひっぱられ揺れる。

雨は外国になんか行かない。私と離れない。最後じゃない。来年も雪のために西瓜を買って一緒に帰るの。

「最後になんかしないもん」

「ずっと一緒にはいられないよ」

「どうして」

涙がこみ上げてくる。

「海は僕なんか捨ててしまえばいいんだよ」

雪がナツを捨てないみたいに。

私も雨を捨てない。それだけのことだと雨は言った。

「違うもん。違う。私は海だよ。雪じゃないよ。雨は私と結婚するんだよ。だって運命なんだよ。同じ日に生まれて、ずっと一緒にいたんだよ」

私は、なんでこんなに雨が好きなのかわからない。雨なんてただの馬鹿で、捨ててしまえばいいものなのに。こんなに好きになる価値なんてないのに。

「一人になりたいんだよ」

西瓜のひもをぎゅっと握り、俯いた。

「雪も、ナツも、海もいないところで生きたいんだよ。意味なんかない。理由もない。海とずっと一緒になんかいられない。僕は海の邪魔になるよ。ナツみたいに。俺はナツにそっくりだから」

「でも私は雪とは違うよ。雪も、ナツのこと、どんなに浮気してたって好きだよ」

「違うよ。雪は俺がいるからナツを捨てないだけだよ。僕が邪魔してる。僕がどこかに行けば、

ナツは捨てられる」

「違う。違う。違うよ」

どうして分からないのよ。

雨は私で、私は雨。なのに、わからないの。

雪がかわいそうだよ。ナツもかわいそうだ。自分の息子に、こんな風に言われて、捨てられる両親。

理由なんかがないのなら、どこにも行かないでよ。

私は西瓜から手を離し、雨の手を掴んで引っ張り、走った。

重い西瓜と、早く走ろうとしない雨はもどかしかった。走って走って、五月家のあるアパートに着いた。玄関を勝手に開けて、私は叫ぶ。

「雪！ 雨は私と結婚するの！ 雨は私のものなの！ 雪にはナツがいるんだから、私にちょうだい」

泣いていた。

凶々しいことを言いながら、泣いて叫んだ。雪は何事かと言う顔をして、私を見た。

「海？」

「雪が捨ててよ。雨を捨てて。そしたら、雨はどこにも行かないの」

「違うよ、僕は」

私は雨に掴みかかって、床に引きずり倒して殴った。

雨は両目を堅くつむって耐えていた。綺麗な頬を平手でばしばしと叩いた。

この頭から出て行けばいいの。孤独になりたいなんて気持ち、飛んで行けばいい。何度も何度も殴った。

疲れて、私は横たわった雨の隣に座り込んだ。情けなかったし、哀しかった。ぐずぐずと泣いて、床に涙が落ちた。

雨は目をつむったままだった。そのまま、さっき私に言ったことを雪に少しづつ話した。雪が、私と同じように雨を叩いた。

「いかないわよ。どこにも行かない。私の可愛い雨は、私の大事なナツとの子供なんだから。あんたが外国に行くって言ったってお金は出してやらないわよ。ナツが別れようって言ったなら、こう言ってやる。ナツがいなくてころじゃ私は動けない。ナツがいるから家を飛び出して遊んでるのよって。ナツは大事な、私の大事なものよ。十六年前からそうよ。ごめんね、雨、十五年も、ずっと、そんなこと分かんないくらいダメな母親で。捨てられるのがこわいののは私もなの。綺麗じゃなくなったら、家にいる大人しい女になったらナツに捨てられそうで怖かった。海、私は雨も、ナツも捨てられないけど、雨を、あんたが縛り付けてよ。私から取り上げないように見張ってよ。怖い」

馬鹿な、家族だった。互いに、捨てられたくない、置いていかれたくないと思いあっていた。それも全部、全部杞憂だった。うしろからぐずぐずと泣き声が聞こえて、振り向いたところにいた、雨の馬鹿な父親も、同じことを考えていたのではないかと思う。家族三人で、怯えて暮らしていた。それを私は、分かった。だから壊してやった。

これで、もう、ナツも、雪も、雨もどこにもいかないでしょう？

馬鹿な三人はまた泣きながら、誓い合った。もう疑わないことを。

私は壊した一つの家族を、少し離れて見た。新しい形に、急速に再構築されていく。でもそこに、私はまだ、入れない。

この愛しい馬鹿な三人の家族に、私はまだ、入れない。

夏が過ぎて、雪はため息をついた。雪なんて名前の癖に、冬が嫌いなのだ。夏も暑くて嫌いだけど、西瓜のために生きているのと宣言していた。

私たちは雪のお使いで西瓜を買いに行かなくなった。けれど、雪は家にいた。夜になっても、若い女の子みたいにはしゃいで出かけなかった。香水を付けて、その匂いが消えた頃帰ってくることもなくなった

「秋の果物もおいしいって気付いたからよ」と、誰も聞いてもいないのに言い訳をした。ぶどうの皮をむく指は、マニキュアの剥げかけた爪をしていた。

「そのうちぶくぶく肥えるよ、雪」

そう言うと、ぶどうの果汁まみれの手で殴られた。

私と雨は、高校受験をしていた。雨は頭が良いから...というか、勉強だけはできるから、普段と変わらずに見えたけれど、私は鬼のようなオーラをまとって勉強していた。おかげで、間食が減って二キロも体重が減った。それくらい、雨と同じ高校に通いたかった。

ナツは、夏休みのあの一件以来ずっとご機嫌で、私は正直気持ち悪かった。今も、雪がむいたぶどうを食べてにやにやしたり、私にむいてくれたりしているけれど、私と雨はそれを無視して自分で皮をむいて食べた。ナツをいじめるのが楽しい雪の気持ちが少し分かってしまった。

西瓜を買わない秋の帰り道も、私と雨は一緒だった。雨と一緒に五月家に帰って、それから自宅に帰る。それが私の日常だった。ある日には後輩の男子生徒に付き合ってくださいと告白されたけど、私には雨がいますのですぐ断った。雪にそれを話すと受験してる先輩にちょっと失礼よね一気のつかえない子ね、と言った。一緒に聞いていたナツはまたにやにやして、雨は聞こえないふりをしていた。

秋が深まり、アパートの前の街路樹が葉を紅くして、散っていく。落ちた葉は雨でぐずぐずに崩れて、茶色くなり、いつの間にかどこかへ消えた。そして、冬になった。冬の雨は冷たく、そのうち雪になるだろう。

私はセーラー服の上にコートを着て登校するようになった。色が白いから、黒いコートがとても似合うと雨に褒められて、私はらしくもなく顔を赤くして照れてしまった。

雪は相変わらず果物を沢山食べていたけど、太る様子はなかった。こたつが姿を現した五月家で、「俺の嫁、綺麗でしょ」と笑うナツを無視して、雨にみかんを剥いてあげた。

白いすじをちまちま取るナツを女々しいと雪と一緒にいじめたり、こたつの中で雪の細い腿を蹴ってやったりしているうちに冬は深まっていった。

幾度か空から白い雪が降った。一度、積もったので、冬休みに入っていた私と雨は勉強を中断して子供らしく雪だるまを作ることにした。けれど、雪がほとんど集まらなかったのも、雪だるまの胴体になるはずだった雪球がひとつと、雪うさぎをたくさん作った。

十五年間で一番みかんを食べた冬休みが終わって、年が明けると。私と雨はあけましておめでとうと言ひ、ナツと雪と四人で初詣に行った。雨と同じ高校に受かりますように。そう祈った。普段は神様なんか信じないし、祈ったりもしないけれど、これくらいはいいだろう。隣で同じようにしていた雨を見ると、もう顔を上げてナツや私が終わるのを待っていたようだった。ナツは「給料、上がりますように...」と切実そうに呟いていた。

それからおみくじを引くと、私は末吉、雨は中吉というつまらない結果だった。雪は「あたらないわよこんなの」と言いながら雨のおみくじを楽しそうに読み上げていた。

受験、合格発表までは、一瞬のように過ぎていった。私も雨も、市内で二番目くらいのレベ

ルで、通学は電車で一本という高校に合格できた。高校も一緒に学校まで通うよね、と雨に言う  
とすごく嫌そうな顔をされて私は傷ついたので腹を膝で蹴り上げてやった。

卒業式は、とてもすがすがしい気分になれた。

寒さもだんだん弱まってきて、朝、学校へ向かう前に雨と私の最後の学ランとセーラー服の写  
真をナツが撮った。

雨の学ランを見るのも最後だ。今度からは、高校生。二人ともブレザーで通う。着たことのない  
制服を手にしたとき、私は大人に近づく気がして嬉しかった。私はまだ、それを身に付けてみ  
てはいない。入学式で雨と並ぶとき初めて着てみたいのだ。

雨と一緒に中学に向かう最後の道。雨はいつもと少しも変わらない表情をしていた。

卒業式が終わり、証書を持って雨と一緒に帰宅した。私は自分の部屋で制服を脱ぎ、私服に着  
替えた。

脱いだばかりの制服を抱え、庭に出る。十年前ほどまでは色んな花が咲いていた、今は荒れた  
草むらのようなそこで、私はマッチを擦った。

布の上に落とすと、ぶわりと燃え上がる。紺色の生地 of セーラー服が、赤い色に変わって燃え  
、小さくなっていった。

もっと燃えろ。燃えてしまえ、何もかも燃やし尽くしてしまえ。

そして、火は小さくなる。後には制服だった黒いかたまりが残った。私はそれをスニーカーで  
踏みつけて完全に消火したことを確かめ、走って五月家へ向かった。

## 第二章

---

愛しい妻との間に子供が生まれて、三年が経った。

昔は子供が嫌いだった妻、雪も自分の息子、雨は可愛いらしく、いつもあやしては笑う雨に喜んで甘やかしている。

少し前まで、俺はこの子供が怖かった。子供と言うものが、そもそも怖かった。異常に小さな身体で、何も汚れたことをしなくて、母親の世話がないと生きられない。得体の知れない生き物だと感じていた。

それだけでは、ないのかもしれない。今では、俺と雪にそっくりなこの子供は、目が雪と同じアーモンド形の二重で、唇は俺のように薄い。広い額、小さな鼻、そのどれもが見慣れたものだった。けれど、生まれたばかりの頃は俺には零歳児の見分けがつかなかった。皆同じ子供に見えた。それで、思った。貞淑という言葉から程遠いこの妻は、俺以外との間にできた子供を産んだのではないかと。

雪と俺が結婚したのは、四年前。俺が、結婚してくれないなら死んでやるとか、もしかしたらもっと物騒なことを言ったかもしれない、半分脅迫のような形で結婚を迫った。雪はため息をつきながら婚姻届に判を押した。結婚式の最中も、それからいままでずっと、雪は俺の顔を見るとため息をつく。やっぱり雪は俺を嫌いなんじゃないかとびくびくして毎日を暮らしている。けれど美しい妻が隣にいることに、俺は毎日幸せを感じていた。

三歳の祝いのケーキを、向かいの家に住む同じ誕生日の子供、海と一緒に嬉しそうに食べる息子を見て、俺にも自然と笑みが浮かんだ。

雨が八歳になって、少し経った。私の夫、ナツが今までしていた仕事を首になった。わりと有名なショップで、ブランド品を売る仕事だった。馬鹿なこの男にはもったいないくらいの給料をもらっていた。

ナツに問題があったわけではなかった。ただ、二十八歳の彼は、美しすぎた。私も、自分は悪くないのに同じ目にあったことはある。ナツに一目ぼれした娘が、店で暴れたのだ。

ナツは昔から顔だけは綺麗な男だったから、ブランド品の好きな凶々しい中年のオバさんや見栄っ張りな娘に人気があった。ナツを目当てに店に来て、高いものを買って帰っていく。そのおかげでうちはろくな大学を出ていない夫婦にしては困ることなく暮らせていた。

ミーハーが顔を眺めにくるくらいならいいのだ。ただ、性質が悪いのは本人がいる間は物陰から見ていて、ナツがいなくなると他の店員に彼の名前は、とか、どこに住んでいるのかとか聞きだす女だった。

その娘はナツを店から家まで付けてきた。そして、アパートの部屋の鍵を開けて入るナツを見て、家を知った。一人暮らしだと完全に信じていたのだ。私はそのとき家にいたが、夫を出迎えるためにわざわざ鍵を開けてやったりしなかったのだから、そう思ったのだろう。

ある日、馬鹿な夫は遅刻をした。店に着くなり、待ち構えていたオバさんどもに「いや、夫婦そろって寝坊してしまいましたー」とか言っただけだ。それを運悪く、その娘に聞かれてしまったのだ。私は話に聞いただけだが、恐ろしい形相だったらしい。多分、脳内でその娘とナツは結婚でもしていたのだろう。

「私がいるのにどうして」だとか叫びながら、ナツに殴りかかった。私もナツを殴ったことくらいはあったけど、手加減してだ。キレて百パーセント以上の力を出したその娘のせいで、私の所有物のナツは頭を床に強く打って、おそらく余計馬鹿になった。ナツが気を失っているうちに、娘は警備員とオバさんたちに取り押さえられた。

これが、先週までに起きたこと。その件でナツは仕事を止めざるを得ない状況になった。上司（おそらく男だろう）に気に入られていなかったこともあったようだ。そのため、今夫は求職中。

私はというと、ナツが働いているのを尻目に不倫していた。結婚してすぐに私は他の男と遊び始めた。とっかえひっかえというやつだ。私の言い分も聞かず無理矢理結婚させたナツへの報復のつもりだった。ナツは気付いていながら何も言わなかった。報復は成功しているようだった。

しかし、夫が無職になり、私は今までの男と縁を切った。そして、高校時代の知り合いで、十年経った今はエリート街道を歩いている男たちに連絡を取った。まあなんというか、お金の援助を求めた。

はっきり言ってしまうえば、売春だった。十年前と比べて衰えるどころか美しさを増していた私に、男たちは断ることを知らなかった。私は大いに働いた。ナツはそれも知らずに、似合わない肉体労働のバイトをしながら、再就職先を探していた。

馬鹿なナツはお金の管理ができなかったのだから、私がすべてを握っていた。ナツは自分の少ない給料で親子三人暮らしていけるわけがないことなど知らなかった。私は働いた。

そのうち、ナツは再就職が決まった。今度は小さな印刷会社の下っ端と言ういかにも給料が少なそうな仕事だったが、暮らしていくのに不足はなかった。けれど、私は気付いた。お金がないと、美しさを保てないではないか。

化粧水も美容液も、学生の頃から高いものを使用していた。化粧品、服、すべてお金がかかる。働いたことのなかった私はそれを知った。

そして、本来なら必要なくなった売春を続けた。働き、働き、働いた！

高校時代の、お金持ち相手。年上好きな大学生。

私は美しい男だけを選んだ。何があろうと、美しい男だけ。ナツより美しい男が存在しないことを知って、愕然とするときもあった。

私の夫は、美しい！ その美しい夫を放って、不倫に励む私の醜さ！

私はナツを恨んだ。憎んだ。それと同時に愛していた。私に可愛い雨をくれた夫。私がいなくては、くたくたになって死んでしまうだろうと思わせるほど、私を愛してくれる夫。

これを手放すことはできない。いや、それは理由にはならない。

理由なんてない、ただただ愛していた。愛していた！ 馬鹿で美しい私の夫！ 雨の父！ 彼に捨てられることはあってはならない。そのために、いつまでも美しくなくてはいけない。だから、私は働いた。自分自身を切り売りし続けた。

### 第三章

---

昔から、恐ろしかった。いつも隣にいるのは、海だった。向かいの家に住む少女。自分と同じ日に生まれた、少し似た顔を持つこの少女が怖かった。どうしていつも、一緒なのだろう。妹でも姉でも、双子の片割れでもないと言うのに。

母も父も、僕と海をふたりでひとつのように扱った。ならば、どちらかいらないのではないか？ そう思うこともあった。

そんな不安も、いつしか消えた。けれどその頃、海は言い始めた。私と雨は結婚する。僕の気持ちなど一度も聞かずにそう言った。

海が嫌いなわけではなかった。けれど、僕の何がそんなに好きなのか分からなかったし、両親が結婚したときの話を思い起こさせた。ナツが雪を脅迫するような形で結婚した。母の思いもきかずに。

雪はもう覚えていないかもしれないが、とても幼い頃、僕にいつも言っていた。

あなたのお父さんは馬鹿なの。私はこんなに好きなのに、必死になってね。私もとても馬鹿なの。私がひとこと言えばすむのに、ナツを所有してたくて仕方ないんだもの。

僕の両親と同じように、僕と海は歪に結婚する気がしてならなかった。呪いの様に、私と雨は結婚すると言う海。呪いの様に、海と僕は結婚するのだと感じてしまう自分。僕は海の所有物になり、捨てられる。

十五歳の頃、僕は母の思いを知った。母は父を捨てていなかった。子供の僕が思うより、大人の心は複雑だった。

あのとき、海は僕と両親を淀んだ瞳で見ている。僕にはその心が分からなかった。なぜ、いつも僕たちのそばにいて、四人でいることを幸せそうにしているのに、そんな暗い目をするのか。母より、父より、海が一番分からなかった。家族ではないのだ。遠い存在なのだ。当たり前のはずで。でも、分かるのが当たり前に思えた。それがまた、海と僕の呪いの様に思えるのだ。

僕と海は、二十一になった。あの十五の日から六年、ブレザーを着た高校時代が過ぎ、同じ大学に入った。学部は違ったが、海は昔ほど細かいことには執着しなくなってきた。それがだんだん、僕と海の間が何かを絡めとって太くなっていく様のように感じられた。

その日、ナツは出掛けに「帰りに葡萄買ってくる」と言った。秋だった。六年前より少し衰えてもまだ美しい雪は「おいしそうなの選りなさいよね」と言った。

しかし葡萄は、地面にちらばり潰れてしまった。帰り道、ぶどうを片手に歩いていたナツは車とぶつかり、葡萄の汁が飛び散るように血液を撒き散らし、跳ね飛ばされた。頭を強く打ち、意識不明。

そして今僕は、手術室の前で行きと共に手術が終わるのを待っている。

「ナツは」

病院に駆けつけてきた海に、首を振る。

「手術で、血を止めた。まだ、意識がない」

「ナツ」

海は涙目で呟き、顔を両手で覆った。隣に座る雪が立ち上がった。

「雪？」

「待ち合わせがあるの」

平坦な声だった。当たり前のような言い方だった。

僕は信じられない思いだった。

六年前のあの時言ったではないか。ナツがいるから家を飛び出して遊んでいる、と。ナツが起きない今も、他の男のところに行くというのか。

「行くな」

「行くわよ。ナツは止めないわ」

「止められないだけだよ。何で、何で行くんだ」

看護婦が慌てたように走ってきて、お静かに、と僕たちをなだめる。

「あんたたちが待っていれば良いでしょう。寝てるんだからわかんないわよ。私は行かなくちゃいけないの」

「どうして！」

どうして、は、母に一番聞いてはいけないと、それまで思っていた言葉だった。

どうして浮気するの？

聞いたら、父を恨んでいるからだと答えられそうで嫌だった。

雪は涙を溢れさせ、椅子に座りなおした。口を開いて小さな声で話し始めた。

「自分の子供にそんなこといたくないけど、ねえ、わかるでしょ？ お金がいるのよ。家族三人で暮らしていくだけ、ナツの給料じゃそれしかできない。雨の雀の涙みたいなバイト代も、ありがたいけど、まだ足りないの。あんたの学費、私の汚いお金で払ってる。私は、男に金をもらって、それで綺麗でいるのよ」

はっきりと言わなかったけれど、初めて聞くその話に、僕は体中の力が抜けた。

不倫をしていると思っていた母は、自分を売っていた。

僕のために。

「僕の将来のため」。

雪に似合わない、現実的で母親らしすぎるその明るい言葉。そして、自分は穢れたと泣いた。

「綺麗じゃなくても、ナツは雪が好きよ」

海がそう呟いた。

「知ってるくせに、ずるいよ」

「知らないわよ、知らない、知らない——…」

泣く雪を冷めた瞳で見つめ、慰めや責めの言葉を呟く海。

異様な光景だった。四十一歳の美しい女と、二十一歳のとても美しい女。

「お母さん」

僕は雪の前にしゃがみ、自分の母をそう呼んだ。初めて、そう呼んだ気がする、きっと遠い昔には呼んだかもしれない、呼び方で。母ははっと、顔を上げた。

「お母さん。俺が、早く大人になって、ナツも...お父さんもお母さんも働かなくていいようにする。そうしてほしいんでしょ？ 綺麗じゃなくても構わない。お父さんもお母さんも綺麗じゃなくても幸せだと思えるように、これから僕がする。ねえ、男は皆捨てて。ナツじゃなくて、自分を捨てればいい」

雪は首を振り、駄々をこねるように叫ぶ。

「無理よ。今更、無理よ」

「全部許してくれる。ナツも、僕も、そのまま構わない」

お母さん、は、また泣いた。わめいた。海が抱きしめて、暴れる雪をなだめた。

僕は、呪いで繋がれた海に言った。

「僕は、お母さんとお父さんを、幸せにしたい。不幸にしたくない。大学を出たら、働く。海のためには働けない。二人のために働きたい。だから結婚はできない」

海はまた、空洞のような瞳で僕を見た。何の表情もそこにはなかった。

二十一歳。僕は大学を出て、就職をする。そして、母が関係を持っていた男たちよりも沢山稼ぎ、母を楽にさせる。ずっと、苦しんできた。母も、父も。自らの呪縛によって。そのために、呪いの糸でつながった海を断ち切った。

さようなら、海。

## 第四章

---

今日は、私と雨の結婚式だ。白いウエディングドレス。ヴェールに、ブーケ。世界で一番綺麗な女になったようで、気分が良かった。雪も、「今日だけは私より綺麗よ」と言って笑った。「感謝しなさい、私が貯金してたから、結婚式できるんだからね」なんて、場に相応しくないブラックジョークを吐いた。

初めて五月という家族を壊した十五歳のあのときから、十年が経った。四十五歳の雪は、やはり少し肥えて、それでも瞳はキラキラと光る美しい女だった。

ナツは思い通りに動かなくなった左腕をぶらぶらとさせて、人形のように美しいままの顔をにこにこさせていた。

「なんでかなあ、雨が結婚するって言うより、海をお嫁に出すみたいな気分。嫁に来るのになあ」

「ナツの嫁じゃないんだけど」

「ナツの嫁はここにいるじゃない」

冷たく言い放った雪に、ナツはうん、といてにやにやした。うちは華があるなあ、とかオヤジらしいことを言っていた。

支度のできた私の前に、雨が現れた。

「海と話してもいい？」

「いいわよ、行こうナツ」

雨の両親は手をつないで出て行った。

「雨！ きれい？ きれい？」

「うん」

「雪よりきれい？」

「うん」

雨は、四年前の病院で雪を責めたときと同じ顔をしていた。だから、私は逃げたかった。雨に話をさせたくなかった。でも、ウエディングドレスじゃ、早く歩くこともままならない。

「五月雨と海が結婚したいのは」

私は心を閉じた。何も聞きたくない。

「五月海になりたいだけなんでしょ？」

「違うよ」

明るく振舞い、そう言ってくるりと私は回った。

「五月海になりたい。海が五歳の時から、二十年思っていたこと」

背中を向けた雨が、そう言う。違う。

「そうだよ。雨と結婚したかった」

「僕と結婚すれば、五月海になれるから」

「五月海になるのは、雨と結婚するから——」

「僕はいつも思った。家の中に異物がある。異質なものが一人いる。それが、ナツのことか、雪のことかと考えたときもあった。でも、それは海。五月じゃない、西野海という名前の君のこと。海は家族じゃない」

贅沢な孤独。

この男が少年だったときに求めていたもの。

ふたつの家族の間で生きる私は、贅沢。そして、孤独だった。そう、雨は続ける。

「どちらの家族にも、なりきれなかった」

頭のいい父と、頭の悪い母と。

私のお母さんの旧姓は、雨宮。雨宮優子。それが西野優子になって、また雨宮になった。

私の名前も、ほんとはきっとそう、雨宮。昔はそう思っていた。

「海のお父さんとお母さんが離婚したのは、五歳の頃」

お母さんが雨宮優子になった。私は、西野のままだった。置いていかれた、捨てられた。でも、私はお父さんの娘。

「急に、僕と結婚すると言い出して、うちに入り浸るようになった。あの頃からだったね。お父さんが再婚した頃から」

雨宮優子、それ以外の女が、私の母になった。そして、子供を産んだ。

頭のいい父と、頭の悪い母と、私と似ていない弟。

「その家に帰りたくなくて、うちにいたんでしょ？ それで、いつまでもいたかった。五月海になりたかった」

「なにがわるいの」

「僕は、手段に過ぎなかった。だから、どんなに好きと言われても、信じられなかったし、違和感があって。海は、僕と結婚しても異物に過ぎない。五月海になったって、僕とは違う。ナツとも雪とも血は繋がってない」

ずっと、考えないようにしてきた。思考を遮断してきた。

お父さんのこと。新しいお母さんのこと。私に似ていない、父と義理の母に似た、よく、似た、弟のこと。西野という苗字。

「何が悪いの。私は雨が好きよ。ずっと好きだった。羨ましかった。あなたの家族になりたかっただけ。好きなもの。私は、西野なんて家はどうでもいい、それだけ、それだけなの、ねえ、何が悪いのよ」

もう、何が言いたいかわからなかった。

ぐずぐずに壊れた、わたし。私の理想の家族、五月と、いう名の。どうして、どうしてこれから結婚するのに、こんなこと言わなきゃいけないのよ。

「頭がぐらぐらする」

私は椅子に腰掛けた。

「出て行って。何がジューンブライドよ。暑いわ」

「結婚はするよ。してみた、分かるよきっと。海が異物であること。優子さんみたいに、出て行くことになるかもしれないね。...ほら、忘れてる。手袋しないと。もうすぐナツと雪も戻ってくる。時間だから」

雨は私の左腕にレースの手袋を渡した。いくつものケロイドの消えかかった左腕。

「フライパンで火傷したとか、包丁で指先を切ったとか、皆嘘でしょ？」

「そうよ。自分でやったの」

心配して欲しかった。もしかしたら、父親か、継母にやられたのかとか、そんなに辛いのかとか。雨に心配されたくて、自傷した。

「女って怖いね。雪も、海も」

「手放してやらない。私と結婚したからには、二度と離さない。自堕落になんか生きさせない。」

死なせない。どこにも行かせない。私のために生きさせるわ」

いらない。

西野なんて名前、いらない。私は五月海。

雨が部屋から出て行った。雪と、西野家の母が部屋に戻ってくる。私は手袋をはめて、立ち上がった。

サムシング・フォー。なにかひとつの、古いもの、新しいもの、借りたもの、青いもの。

私のヴェールは、西野優子が使ったもの。それを見て驚いた顔をした父に私は笑いかけてやった。長手袋は、私の傷を隠すための新しいもの。真珠のネックレスは、大学時代の友人に借りたもの。ガーターには、青いリボンがついている。

私は、完璧な花嫁。完璧な隣人でも、娘でもなかった私が、これからは幸せに生きるの。

バージンロードを、父の隣に立った。

掴まっていた腕を放し、父を置いて雨に向かって歩いていく。

これが、新しい私の答え。

いいえ、もっと前に父なんて捨てていたの。

海は蒸発し、陸に雨となって滴る。その滴は流れてまた、海へ流れていく。ほら、これが答え

。

わたしはあなた、あなたはわたし。お互いのために生まれたのでしょうか。

だって、一人になった私を優しく五月家に誘ってくれたのはあなただったもの。あなたが、悪いのよ。

私はあなたを永遠に愛する。二十五年もの間、このときを待っていた。

## 第五章

---

僕の名前は、五月雨。僕の妻は、五月海。僕も海も、同じ五月に生まれた。僕の両親はすこし冗談が好き過ぎるのではないかと思う。

五月雨というのは「さみだれ」とも読む。幼い頃「さみだれ」と一度読まれてから、その意味を調べたことがある。

乱れること。「さ乱れ」と書く。

そのとおりに、五月家は僕によって乱れた。僕が孤独になりたがったり、海を嫁にしたことにより。

その乱れの名は、「翠（すい）」という。

海が名づけたので、本当のところは分からないが、「翠」は「水」なのではないかと思う。

海は蒸発し、陸に雨となって滴る。その滴は流れてまた、海へ流れていく。僕と海の絆の水。それが、娘の翠。

子供嫌いなはずの雪も翠にはでれでれして、世話を焼いている。「かわいいかわいい」と甘やかしては、冷たくされて悲しんでいる。

ナツは可愛い孫のために果物の皮をむいてやりたいらしく、腕のリハビリに励んでいる。

五月海はといえば、落ち着いたものだった。

左腕の傷も目立たないほどに癒え、時折三十秒で着く実家に戻っては両親に甘えている。

「お母さんが三人、お父さんが二人。ねえ、私って贅沢じゃない？」

無理したように冗談を言って、泣いた。僕は海を一人で泣かせないために、いつも抱きしめて、頬を伝う水を拭う。

五月の雨の音が、部屋に響く。五人で一つの家族。海がいて、そして翠がいて成り立つ、少し歪な五人の家族。

思っていたより何倍も大事なものになってしまった。この中で孤独が欲しいなんて、贅沢に過ぎるだろう。